

町内にはさまざまなコミュニティがあり、独自の活動をしています。そんな皆さんの活動やイベントをご紹介するコーナーがスティ・スマイル(笑顔のままで)です。

Stay Smile

ステイ・スマイル

Stay Smile 高原のアーティストを訪ねて

東に八ヶ岳、西に入笠山を仰ぎ見る、さわやかな高原の町、富士見。この地に生まれ、または惹かれて制作する、素敵なアーティストたちを紹介します。

【今月のアーティスト】 すがの たかね さん 木工作家・富士見町在住

すがのたかねさんは、東京都の出身で、玉川大学文学部芸術学科を卒業。商業ディスプレイの仕事に携わった後、岡山県の家具工房での修業を経て独立。富士見町に移住し、八ヶ岳のふもとに、工房「wooden farm」を構え、暮らしの家具やインテリアを制作しています。自らを「職人ではなく、木でものをつくるひと」と言う、すがのさん。桜や栗の木を材料にした遊び心あふれる掛け時計、家や雲をモチーフにしたかわいらしい「白のオブジェ」からは、やさしく暖かな物語が紡ぎだされるかのようです。これらの作品は、ディスプレイデザインを手がけた経験を生かし、作品自体が生み出す影により、立体感と陰影の妙が感じられる工夫が凝らされています。手元において日々の暮らしの中で楽しみたくなる、そんな魅力に満ちた作品たちです。

すがのさんは、全国のギャラリーや百貨店で、個展やグループ展を開催しています。2010年には、工房の隣にギャラリー「OVAL PLANET」をオープン。すがのさんの作品はもちろん、全国の作家仲間の作品をセレクトして展示・販売しています。また、2001年から運営に携わってきた「クラフトフェアまつもと」では、3年にわたり事務局長を務めました。

自然の中の暮らしに制作のヒントがあると話す、すがのさん。豊かな自然に恵まれた富士見町で、今日も木のぬくもりが宿る作品を創作しています。

[Information] すがのさんの作品は、ギャラリー「OVAL PLANET」(☎090-4106-5329／住所:乙事2576)でご覧いただけます。 これからの展覧会:ハケ岳俱楽部(山梨県北杜市)8月13日(水)～20日(水) ブログ:ovalplanet.exblog.jp

文:前島孝一(小海町高原美術館館長・清里フォトアートミュージアム職員) 富士見町富士見在住
facebook <https://ja-jp.facebook.com/koichi.maeshima.1>



▲掛け時計
「3じ15ふん」



▲白のオブジェ
「宝物箱」



▲制作の様子

Stay Smile 全ての人へ感謝の気持ちを持つ

富士見中学校 女子バレー部



富士見中学校女子バレー部は、3年生4名、2年生7名、1年生6名の計17名で活動しています。3年生が少ないため、チームは2・3年生で構成しています。そのため、学年を超えて声を掛け合い、支え合いながら練習しています。そんな私たちの目標は、「県大会出場」です。そのために、自分たちの課題を明確にしてから練習に取り組み、レシーブ練習を欠かさず行っています。ボールが落ちた時には誰がそのボールを拾うのかを確認し、とりこぼしがなくなるようにしています。大会が近い今はチーム練習も行い、本番を想定した練習を多く行っています。また、バレー部では声も戦略の一つになってくるので、練習中は常に声をだして自分たちで明るい雰囲気をつくっています。

そして、部員の目指す姿として「自律」を掲げています。その達成のために、水曜日の朝部活では、体力向上だけでなく、一人になって走るという目的を持って、20分間走を行っています。また、日常生活では、自分の意見を持って積極的に発言したり、自分で決断をして行動に移すことなどを心がけて生活しています。

6月に行われた中体連諏訪大会では、南信大会に進める枠を勝ち取り、今、私たちは南信大会に向けてチーム一丸となって練習に励んでいます。南信大会では、武器であるサーブを生かして、今まで支えてきてくださった全ての人への感謝の気持ちを持って、全力を尽くし、精一杯プレーしてきます。応援よろしくお願ひします。

(女子バレー部部長 名取希生美)



Stay Smile 「命は捨てるな、物は捨てろ、安全は準備に比例する」

富士見町赤十字奉仕団

私たちは、人類の有史以前から様々な危機に遭遇し、災害を経験し、生命・財産・文明・社会を失い続けてきました。それなのに、なぜ災害から目をそらしてしまうのでしょうか。



1. 自分事のように思えないからでしょうか
2. 対策の施しようがないと思うからでしょうか
3. 自分1人で何かしたところで何も変わらないと思うからでしょうか

富士見町では昭和34年の台風灾害、昭和57・58年の台風灾害により大きな被害を受けました。研究者の経験工学の理論では、「災害は30年に1度発生する」と言われています。

今年は、昭和58年の台風灾害から30年目に当たる年であり、今後が実に心配であります。今年の大雪も、過ぎてみればどうということはないが、寒い中、除雪機の燃料が買えない（物が入らない）、各家庭の暖房にも燃料の調達ができないなど、苦労したり寒い思いをしたのではないでしょうか。

繰り返される災害の現状を目の当たりにした時、私たちの存在はあまりにも小さい。危機に遭遇し、被災するかもしれないという宿命をもっときちんと捉え、積極的に前向きに共存していくういう雰囲気にならなければ、私たち人類は未来へ向けての新しいステージに立つこともできない。だから、私たちは災害という人類の課題に対して、その背景を受け止め、危機に対して積極的に備え、一致団結を図ることで、社会全体の安心感を向上させようではありませんか。

（富士見町赤十字奉仕団 委員長 名取増昭）



◀程久保川の
激流
(S57)



◀釜無川の
激流
(S57)



◀白樺団地の
土砂崩落
(S57)

避難時の心得

万一、災害によって、現在の位置から逃げる時は、常に生命の安全を第一と考え、病人・子ども・高齢者・妊産婦等を優先して、二次事故に巻き込まれないようにします。大きい荷物は、避難の行動を妨げ、思わぬ事故の元になります。必要最小限の必需品を普段から準備しておき、家財や物品に執着しないで避難することが大切です。

Stay Smile 子育てはたくさんの笑顔とたくさんの手で～子どもの領分を守るために～

NPO法人ふじみ子育てネットワーク ☎62-5505

「手をつなぐ」ということ

「一緒に歩こ！」「ちょっと不安だからそばに居て」「仲間だよね」……小さな子どもたちが自分から手をつなぐ時、こんな気持ちなんだと思います。手をつなぐ相手はお母さんやお父さん、お友だち。そして相手が誰であっても、手をつなぐときは相手に「共感」を求めています。「共感」は安心を生みます。



私たちは活動の場で、小さな子どもとお母さん、小さな子ども同士、子どもと保育士が手をつないでいる場面によく出会います。手をつなぎあっている姿は、見ている者の気持ちもあたたかくします。「共感」でつながっているからでしょうか。

そして、「手をつなぐ」の次には「手を離す」があります。子どもたちは共感してくれたこと、共感しあったことに安心し満足すると、自分から手を離し、新しくやりたいこと、次に行きたいところへ一人で歩きはじめます。子どもたちが手を離すタイミングは一人一人違います。



大人は、子どもが手をつないでいてほしいだけついでいて、スッと手を離し一人で歩き始めたら、その歩みを見守りながら応援する、そんな存在でいたいなと思います。子どもの自立・親の子離れというのは、そんなことなのではないかなと考えます。

